
BRAVE SOMEDAY

K . F ドイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BRAVE SOMEDAY

【Nコード】

N7786Q

【作者名】

K・Fドイル

【あらすじ】

大学生の『僕』は、初めて付き合った彼女のことがトラウマ。悩みの種だった。もう恋なんて…恋人なんていない。

1年後、『僕』の傷も癒え悩みも忘れた頃、親友、前田の行動で悩みがまた戻ってきて…

そんな男の物語…

前書きでも物語は進行中…

1年前の男（前書き）

男

『彼はかわいそうだな』

女

『バカじゃないの！女々しいだけよ』

男

『……』

1年前の男

「わたしね……妊娠したみたいなの……」

目の前の彼女は僕に言った。

こんな時なんて言えばいいんだろうか？彼女の手を握り、喜べばいいのか？それとも彼女に結婚を申し込むべきなのか？

男として、オスとして半人前だった当時19才の僕は、それがわからなかった。

「な、何ヶ月？」

とりあえずそう言った。彼女は俯くと口を開いた。

「キミの子供じゃないの」

「……えっ？」

確かにそうだ。心当たりがない。

やっとの思いで彼女に告白したのは10日前、OKして貰って付き合うようになったのは一週間前。手をつないでデートして、買い物して、やっとお互いの事かわかってきた。そのくらいの関係。始

まったばかりの恋だけど、この一週間生まれて初めて出来た彼女との幸せな時間。僕には勿体ないくらい綺麗な人だ。

「実はね…一ヶ月前…元カレと…」

彼女は語り出した。彼女の言葉が僕を殴りつけた。何度も何度も。

その3日後…

彼女は大学に退学届けを自ら出し、堂々と大学から元々のカレシの元へ、去って言った。好きだったから…大切な人だったから、なによりタイミングが最悪だった。

ショックだった。

男と女の関係のなかったプラトニックな恋は一生引きずるらしい……

確かにそうだ

気持ちだけが宙ぶらりん…

融通が利かないのが男心…らしい…

本来、遊び盛りのはずの大学一年生の僕は、彼女のことを忘れようと必死に勉強に打ち込んだ。

彼女が去って、行き場のない複雑な気持ちを、勉強とサークルの忙しい毎日にぶつけた。

『もう恋なんてしない…』

ありきたりだけど、よく使い回される言葉を胸に秘め、日々を送った。

意外としっくりくるのだ。この台詞は…

1年後の男（前書き）

男「こんな男と思う？」

女「ウジウジ男と変態男？自意識過剰なんじゃないの」

男「厳しいね（笑）」

1年後の男

僕が彼女に衝撃の発言を受けてから一年後。

その時と同じ日付け、同じ喫茶店の同じ席で、僕はなぜか、友人と向いあっていた。脳裏に一年前の苦い記憶がチクチクと蘇ってくる。それを知ってか知らずか、この友人はこの喫茶店に強引に僕を連れてきた。

「…どう思う？」

友人は僕さつきまで僕に打ち明けてきた悩みなど忘れて訪ねてきた。

「どう思っつて……まずは顔見知りになれるように努力すれば……」僕。

「いやさ、やっぱりあの娘好きなんだよ。俺」

大学の友人、前田^{マエダ}は心苦しそうに言った。前髪を必要以上に気にしている。誰も気にしてない、そう言っつてやりたかった。彼は続けた。「俺さ、奥手だから好きな娘の目も見れないんだよね」

その好きな娘は、ほんの数秒前、僕たちのテーブルにアイスコーヒーを持っつてきた女性店員だ。

またオンナを泣かせるのか？僕はそう思っけど口には出さない。

「…そうだったね」

そう僕の同意を得ると、彼はロックオンした相手にどうやってお近づきになればいいか考え始める。その顔は男の僕から見てもカッコいい魅力的な容姿をしている。前の恋愛が終わると、間一髪いれず次の女性が彼の横につく。いやむしろ重複してることが多いぐらいだ。この2年間、いやでも恋愛格差と言うものを認識させられた。

「やっぱ会計の時、話しかけるかなあ」

「どうやって？」

「別に…世間話して、ガードが堅かったら名前ぐらいは…ちょっと押せそうなら連絡先かな？」

「ハハ…いつもながら勉強になります」

彼の自信には笑うしかない。友人として、その自信と容姿を少しでも僕に分けて欲しいものだ。

「それでもってあとは笑顔で会話」

自分の顔の口角を指さし、彼は伝票を手に持つと席を立ち、レジに向かった。

僕はなんだか落ち着かない気持ちでその後に続いた。

今と昔と（前書き）

男

「へんな男もいるもんだ」

女

「男の8割はやりたいたいだけ。」

男

「あとの2割は？」

女

「話しにならない」

今と昔と

半年前、僕と前田は暑い中、駅前の通りを歩いていた。始発電車の涼しさは格別で、まだ朝だというのに外は地獄に感じられた。

その日は週の真ん中木曜日、僕たちはお酒を飲み散々騒いだ挙げ句、終電を逃した。そして、歩いて最寄り駅まで帰る元気もなく、路上で一夜を過ごした。その日の大学の講義が午後からと言うこともあり、気持ちに余裕があったせいだろう。

朝から出勤のサラリーマンやOLたち。平日の通勤ラッシュ、たくさんの人と流れに逆らうように歩く僕たちは場違いな感じがした。僕は、なんだかすれ違う人たちに、申し訳ないような気分になっていた。

「学生の特権だね」

僕はカラオケに行ったせいもあり、嘎れた声を絞り出す。

「ああ、本分は勉強だけだな」

前田は前髪を相変わらず気にしていた。すれ違う人たちは誰も気にしていないと言いたかったが、言わないでおいた。

「今の子可愛かったな。おおさっきのJKは素材がいい？さっきの子は胸が大きいなスゴ」

前田は、好みの女性が通るたびに僕の耳元で女性の感想を述べた。

「お前はどんなのが好みだよ？」

前田はニヤニヤしながら言った。いやらしいニヤニヤが適切だろう。まあ前田のニヤニヤは様になってる。

「好みかあゝいやその…うゝん優しい人かな」

なんというか、その時の僕は女性の好みと言われても、答えられるような心まで成長してなかったと思う。

「優しい？なんかほかにないのか？例えば細身がいいとか、ポツチヤリがいいとか巨乳がいいとかさ」

前田の声が熱を帯びていた。

「うゝん、やっぱりスタイルはいい方がいい、あと料理が上手だといいな」

「なるほど、俺は彼女にまあ料理は作らせるし、浮気はさせない。

飽きたらそこまでだ」

なにか違うのでは？と思いつつ前田の話を聞いた。

「やるだけと本命は分けとかなないと」
「違うんじゃないか？」

その時の前田の熱を帯びた声が頭から離れない。友人とはいえ、恋愛の価値観は共有できない気がした。

「おっ！あの子に声かけてみよう」

前田は小走りですっきのスタイルの良い女性の元へ近づいていった。
そんな前田にため息をついたのを覚えている。

料理を作らせる…

やるだけと本命…

好きってなんだ？

喫茶店の会計レジへ向かうとき、僕はフと少し昔のそんなやりとりと言葉が頭に浮かぶ。僕は前田と一緒にさつき接客をしてくれた女性店員の前へ向かった。前田がわざとらしく口角を上げたのがわかった。

スマイル

「あの僕のアドレスです。よかったら連絡ください」

店員さんと前田は、キョトンとした顔で僕を見た。

「どした？」

前田。

自分で自分の行動を理解できなかった。

私、妊娠したみたいなの？

料理を作らせる…

そんな言葉が頭を過ぎる。1年ぶりに僕はよく分からないが、刀を抜いた。

いやただ単に店員さんが好みだったんだと思う。

...

どうなんだろっ？

頭の中そればっか（前書き）

男

「世の中、不公平だよな」

女

「引っかかる女が悪いのよ。この女々しい男も何がしたいの？」

男

「喫茶店の子がすきなんだよ。でも勝負はついた」

女

「勝負してたの？」

男

「……」

頭の中そればっか

僕はその場を去ろう

と、すぐにそう判断を下した

「カイケイヨロシク」

千円札を前田に強引に渡し、走り去ろうとした。途中、喫茶店の自動ドアに引っかかった。ガタンと音がする。

呆然と僕をみる女性店員さんと前田の視線が痛い。

その後のことはほとんど覚えていない。電車に乗って、隣のおじさんが汗くさかった、それくらいしか覚えていない

あれから3日が経った。だいぶ冷静になれたと思う。

大学の図書館で僕はレポートを書いていた。形式的でいい、なんて言われるけど、そういうのはしっかりやりたいと思うのが僕の性分だ。

とは言いつつもう少しだけ休憩は必要だ。能率が下がる。調べモ

ノをするフリをしつつ、図書館のパソコンで僕はネットサーフィンをしていた。時々浮かぶ喫茶店での愚かな自分の行動を 恥ながら。

『脳内メーカー』

そんなモノが、検索をしていると目に止まった。自分の名前を打ち込むとその人の頭の中を横から見たようなイラストが出る。そして、その人が普段どんなことを考えているのが分かる、なんて触れ込みで、合コンとかでネタになる、なんて友達が言っていたのを思い出した。

僕はなんとなく興味本位で自分の名前を打ち込もうとキーボードを叩いた。

しかし、手を止め、少し考えると友人、前田の名前を打ち込んだ。ズルいと頭で分かっているけど、なんとなくそうだった。僕は

『開始』

のボタンをクリックした。

僕は画面を覗きこんだ。

女女女女女女女女女女女女女女女女男女女女女女女

一瞬僕は吹きだしそうになった。このメーカーは前田のことをよく分かってゐる。そう思った。あの後、前田は喫茶店でのことを言うてこない。

フ

息を吐くと恐る恐るぼくは自分の名を打ち込んでみた。どうか公平な判断を…

開始

クリック！

女女女女女女女女女女
H H H H H H H H

[illegible][illegible]

HHHHHHHH

女
女
女
女
女
女
女
女
女
女

もっと大変な事になつてゐる？僕は少し落ち込んだ。信じられずカナや平仮名で試してみたが、あまり結果は変わらなかった。この脳内メーカーは僕の事を分かつてない…

「お前マジメな事いつも言ってるけど、頭の中でこんなことばかり考えてるのか？」

僕は一瞬ドキリとすると、後ろに前田が立っているのに気づいた。ニヤニヤしながら彼は画面を覗いている。

「うつるさいな！所詮プログラムだよ」
動揺していた。

「ニヒヒ、男はみんな、そんなもんだ」

「違うよ！」

「そういえば喫茶店の女の子から連絡あったか？」
前田は言った。

「あるわけがない」
ぼくは投げやりに言った。Yahoo!のホームページに画面を戻す。

「実は俺、お前が去った後、彼女にアドレス渡したんだよ！そしたら連絡きたぞ。成功した。後は腕次第いゝ」
自分の二の腕を前田は指さした。と言うかショックだった。

「俺の勝ち」

「勝負なんてしてない」
くそ！

「まあそんなおこなよ」
前田は余裕だった。前田は前髪をいじる。誰も気にしてない、そう
言っただけだった。

また次の女に移るのか？彼女が可愛そうだ。前田の犠牲者になるのか…

僕は涙がでそうになる。

前田は図書館の壁にある鏡に映る自分の姿を見ると、また前髪を気に始めた。

「誰も気にしてないんかい！」

今度は口に出してしまった。

「はあ？え？なに？」
前田は僕に目を移した。

周りの人が僕たちを見ているのがわかる。

僕はその場を立ち去った。

くそつたれ！

男であること？（前書き）

女

「なんでこの人はこんなにも自分に自信がないの？」

男

「男はそんな部分もあるんだよ。一部の人は違うのかもしれない」

女

「不便よね」

男

「それだけ必死だったことだよ」

女

「行為に？愛に？」

男

「……」

男であること？

女女女女女女女女女女
女女女女女女女女女女
女女女女女女女女女女
女女女女女女女女女女
女女女女男女女女女女
女女女女女女女女女女
女女女女女女女女女女
女女女女女女女女女女

はあゝ

僕はため息をついた。自宅のアパートの一室で僕はパソコンのディスプレイに映る自分の脳内を見てさらに落ち込んだ。これでは前田と一緒に。

喫茶店での出来事から一週間が経った。一週間、自分の暴挙を責めまくった。それがやっと収まってきた。そんなところだ。やっぱり僕は男だ……

そういえば一年前の「彼女」はどうしてるだろう。子供も生まれて旦那さまと楽しく暮らしているのだろうか？いやそうに違いない。あんないい人なんだ……

幸せならそれでいいはずだ

でも机の上に置かれている携帯電話を僕はチラリてしまう。ハッとして僕はパソコンに向き直った。

今度はアルファベッドで打ち込んでみよう。そう思った。

女女女女女女女女女
女女女女女女女女女
女女女HHH女女女
変変変変恋変変変変
変変変変変変変変変

態

打つ手なしか…
僕は思った。

ピンポン

そこまで考えると6畳1Kの部屋にチャイムが響いた。

扉の前に立った。どうせ新聞勧誘だろう。

もしくは……

前田だった。

とりあえず扉を開けてやる。

「よ！飯でも食べない？」そういつと、弁当屋の袋を目の前に差し出した。

しかしその姿もさまになってる。だから前髪は気にするな！

クソツタレ！

「ああいいよ」

まあ……とは思いつつも大学生の一人暮らしは意外と寂しいもので、僕は家に彼を迎えた。ちょうど話し相手も欲しかったところだ。

前田（前書き）

男「大学生は持ちつ持たれつ」

女「この2人、仲がいいのか悪いの…どっちなのかしら？男の友情？」

男

「そんなところだと思う」

女

「男女の友情の場合だと紙一重になってしまつかしら？」

男

「どうだろう」

前田

前田は部屋に入ってくるなり僕のパソコンを覗きこんだ。

「まだやってんの？あはははははは」

前田は笑った。さまになってる。

「何となくだよ」

机の前でのり弁の揚げちくわをかじり、僕は言った。前田は僕のベツトにあぐらを掻きながら鮭弁の米を頬ばる。日曜の昼下がりの過ごし方は遊びに行かない限り、こんな感じだ。

「レポ書いたか？」

「いやまだ」

「脳内ばかり見てるからだ」

どうせ僕の書いたレポートを写すだけだ。

「うるさいな」

「進歩のないやつめ二ヒヒ」

ニヤニヤしやがって。

「お前はどんなんだよ？メールのことは？」

気になる質問をぶつけてみた。

「うゝんまあまあかな」

真顔で前田は答える。

「なんだよゝまあまああってさゝもう飽きちゃったの？」

おどけた調子で僕は言った。

「…大きなお世話だ」

その時、前田の携帯がなった。すぐに前田は携帯を開き、慣れた手つきで、暗証番号を入力する。前田はジッとメールの文面を吟味しているようだ。

「なんだ？彼女からのメールかよ」

僕は茶化す。

「…まあそんなとこだ。遊びに行かないかって
悔しいが…」

「行ってこいよ」脳内は『女』ばかりだろうが」

「はははは」

前田は笑った。

その後、僕たちはPS2のサッカーゲームをした。一昔前のデータだったけど、この選手は熱いとか、今はあそこに移籍したとかいいながら盛り上がった。2人の決着は中々着かなかった。

気のせいかなゲームを始めて終始、前田は前髪を気にしていなかった。

高橋先輩（前書き）

女

「この男の人誰？」

男

「彼の先輩」

女

「説教臭くない？」

男

「そうかな？オレはいい人そうに見えるけど」

女

「そうね〜でも、男のオレ論ほど、女が聞き苦しいモノはないわ」

男

「……（苦笑）」

高橋先輩

僕は少し懐かしい人と会うことになった。ちなみに1年前のカノジヨではない。いやなにより、幸せならそれでいいんだ。

僕のサークルの先輩だ。先輩と言ってもかなり上の先輩でOBに近いのかもしれない。卒業してもときどき顔を出してくれる先輩で、僕と好きな音楽が似ていたり、気が合う人だった。高橋先輩だ。

「久しぶりにどうしてるかなっと思ってさ」

高橋先輩は開口一番にそう言った。社会人になっても変わらないどこか縛られていない、そんな雰囲気だ。

「仕事ですか？」

僕。

「まあな〜ちよつと大学にも用事があったし、前田とかは元気か？」

前田か…

「ええ、元気ですよ。相変わらず女の子追いかけて、変態やってます」

少し僕は落ち着かない。

「はは〜そっか」

高橋先輩と話しながら今いるこの喫茶店の会計のレジの方を 気にしてしまう。今日はこの前とは違う女のひとが注文を待っていたり、コーヒーを持ってきてくれたりする。多分今日は彼女のシフトがオフなのだろう。あんなバカなことをしたのだ。会えば気まずい。

僕は胸をなで下ろした。

「どうした？」

高橋先輩が言った。

「いえいえ昨日レポートを遅くまで書いていたので、ボーっとしてしまっただけ…」

我ながら嘘がうまくなったなと思う。

「そうか…やっぱり大学生って楽しい反面忙しいよね」

「そうですね」

僕。

そして話題はサークルや大学の話、就活の話にうつり、やっぱり男が集まるとこの話題、恋してる？みたいな会話になった。多分これは人類みな、共通ではないか？と僕は思ってしまう。男女の話題は多分、話していてつきることがないのだ。

「どうよ！恋してるか？」

だいたいこの先輩の質問は単刀直入だ。

「まあ…」

なんとも言えない。

「お前はモテそうだから心配ないか？」

高橋先輩は言った。

「はは、それありませんよ」

僕は肩を落とす。

「そういう高橋先輩はどうなんですか？彼女、大野さんとはどんなんですか？ポニーテールの…」

「うん？ユウコとか？」

分かり切ってるのに繰り返す。まあそうか。名前を口にする高橋先輩は少し嬉しそうだ。高橋先輩とユウコ先輩は相思相愛で有名だったらしい。そして今でも。うらやましい。

「そうですよ。どうなんですか？」

僕はニヤニヤしながら聞いてみる。

「ど、どうなんですかって、上手くやってるよ。ユウコとは少しハニカミ気味で高橋先輩は言った。

「つき合ってどれくらいですか？」

「さあゝ忘れちゃった」

先輩は目を反らした。

「馴れ初めは？」

なんとなくだか僕は、気になった。

「馴れ初め？…うん、あえて言うなら、B・Zと^びず、しりとり、かなあ？」

「B・Zとしりとり？」

僕にはよく分からなかった。

「まあわからなくていいよ。そんでお前は話しないのか？」

高橋先輩は僕の顔を覗きこんだ。

「ああ…ない……」

「うん？言って見るよ？」

「あります。あの…」

なんとなくだかこの人には話しておいた方がいい。そんな気がした。一年前のこと、前田のこと、この喫茶店のこと、アドレスのこと、僕は順を追って話した。いや話していたと思う。まるで蛇口をひね

られ止めどなく出てくる水のように。

「…ふんそうか…前田は相変わらすだな〜ホント」

高橋先輩は頷いた。

「まあそうですね。」

「お前は本当に頭の中、そればかりなんだな」

「そうみたいです」
恐縮です。

「まったくお前はマジメなやつだな」

「はい…」

「前田を見習ってワケじゃないけど、それくらいいい加減に生きてもいいと思うぞ」

高橋先輩はときどき話し方が説教くさくなる。

「はい」

「でもそこがいいところなんだよな〜」

「ありがとうございます」

「恋愛においては結構フリなのかもな」悩みがつきない」
どこか遠くを見ながら彼は言った。

「でも答えを出すまでは思考錯誤の連続だ」

「そうですね」

「悩めばいい。多分簡単に一通りそつなくそれをこなした奴と、苦
労してそれをこなした奴だと、多分だけど後者の方が後々、有利だ
と俺はおもう。」

「はあ…」

「前と後の…なんというか…多分そいつは、初心を忘れない…そう
初心」

高橋先輩はそう言った。

「初心忘れるなんちゃらだ」

「そうですか」

少しだけ沈黙が流れる。

「まあ人の考えは人それだけだな」参考までによろしく」
そこで高橋先輩は爽快に笑った。なんだかこの人は変わらないなと

思った。もちろんいい意味でだ。

「それから…」

「はい？」

「お前は『カノジョ』が欲しいのか？それとも『彼女』が欲しいのか？」

「えっ？」

僕は聞き返した。

「まあいいや、後俺払っとくから」

高橋先輩は伝票を持つ仕草をした。いいですよ、と言いつつも遠慮しない僕。結局高橋先輩が払うことになるのだらう。なんか社会人は格好が良い。

そして先に喫茶店を出ようと先に僕は歩き出した。なんとなく気持ちも軽くなっていた。自然とレジを覗き込む。そのレジにいるのは、この前、僕がアドレスを渡した彼女。一瞬ドキリとし気まずい気持ちになったが僕は彼女に一瞥をくれた。

そして

「この前は嫌な思いさせて、ごめんなさい。じゃあ」

彼女の顔を見据え僕はそう言つたその場を立ち去つた。マジマジと初めて見た彼女の顔はやはり綺麗だった。少し困惑した顔をしていたのがわかつた。当たり前か…

カランカランと喫茶店のドアのベルが鳴つた。

とりあえず、喫茶店の向かいのビルの前で先輩が出てくるのを待とうと思つた。ああ、今日は青空なんだなあと、その日、僕は初めて思つた。

男であること（前書き）

女

「前田、意外にマジメな男ね」

男

「フゝすつきりしたあゝ」

女

「あらどこ行ってたの？」

男

「トイレ、大きいの」

女

「人生一回きりよ」

男

「なんのこと？」

女

「……（苦笑）」

男であること

カランカランカラ…

喫茶店ドアが閉まった。女性店員がポカンとしている。

前田は、高橋と自分の親友の会話をしきりを挟んだすぐ後ろの席で、彼らに背を向ける形で、腕を組んで聞いていた。それを知ってか知らずか、高橋は伝票を持ちながら独り言のように話した。

「あんな感じてよかったのか」
高橋。

「ええ、よかったと思います。アイツは考えすぎるんですよ」
前田。

「ふふふ、そっか。友達思いなんだな」

「そんなことないっすよ」

「で、お前はとうするんだ。オレに話があつたんだろ？」

「ええまあ…実は昔つき合っていた彼女に子供が出来たらしいんです」

前田は前髪を触る。

「ふうんよくあることだ」

高橋は動じない。

「実はその子、オレの子供らしいんです」

「…何ヶ月だ？」

「もう生まれました。元気な男の子らしいです。0歳…」

「…そうか…自分で責任を取ろうと…」

「ええ、オレはとにかく片っ端から女と寝てました…なんにも考えずに…男の本能のままに…調子にのってました」

「昔からそうだった。だがそれはお前の勝手だ」

「でも子供ができたって言われて怖くなったんです」

「……」

「父親になる責任もある。なによりその女の子の人生を変えてしまった」

「そして…」

高橋は促す。

「その女性は親友の大切なヒトになるはずの女性だった。オレは二つ一変に変えてしまった」

「でもマジメなアイツは乗り越えたみたいだぞ。失恋はいい勉強だ」

「そうですかね？」

「ああ、アイツは大丈夫だろう。難しいけど、あとはもう一つの方
に向き合えよ」

「そうですね。先輩に言われたらそうします」

「はは」

「先輩？……オレ大学辞めます」

「どうすんだ？」

「カノジョと実家に帰ってやり直します」

「…そうか難しい道だぞ」

「やりがいがあります。この前カノジョポーズして受け入れて
くれました」

「そっかアイツには？」

「いいんですよ、まだ知らなくてあいつマジメだから」

「そっか…頑張れよ」

その言葉を噛みしめると前田は席を立った。高橋の席の前に立つと言った。

「高橋先輩？」

「うん」

「例のカノジヨさんとは結婚しないんですか？話聞く限りだと、つき合ってもう随分と経つでしょ？卒業してからかなり経ちますよ」
少しだけ前田は冗談めかして訪ねた。

「ははは…気が向いたらかな～そろそろだと思つよ」
高橋は笑った。

「フフフ、そうですか？」
前田は楽しそうだ。

「それじゃあ」
前田は店から出ようと歩を進めた。

「ああ、そうだ！」

変わらぬ先輩は言った。

「なんすか？」
変わらぬ後輩は応じた。

「あのさ……お金かしてくれない？実は財布が今カラで……」
変わらぬ先輩は頼んだ。

「……いっすよ。ははは」
変わらぬ後輩は応じた。

「すまん」
変わらぬ先輩は平謝りだ。

「いいですよ。先輩相変わらずイカついんですね」
変わらぬ後輩は楽しそうだった。

その日から前田は前髪を気にしなくなった。

TAKING SHE ? (前書き)

男

「ホントに彼は大丈夫か？」

女

「男の頭の中は謎ね？」

男

「女の頭の中の方がよくわからないと思うけどね」

女

「……チャック開いてるわよ」

男

「しまった（汗）」

TAKING SHE ?

僕は例の喫茶店で前田と向かいあってコーヒーを飲んでいる。

「なあお前さ、あの娘のこと実は結構タイプだろ？」

前田はレジ前で立っている彼女を見ながら言った。

「そそんなことない」

僕

「そうかならオレが取っちゃうよ」

前田は立ち上がった。彼は裸足なのでパタパタと骨が地面に当たる音がする。彼の容姿は端麗だ。どんな女のヒトだって落とせる。その引き締まった筋肉にここからでもわかる割れた腹筋、尻だって引き締まっていて男らしい。何より彼の下半身の一物は…

なにを言ってるんだ？僕は？

伝票を手に歩き出した前田は映画ターミネーターに出てくるアーノルドシュワルツネッガーのように裸だ。後ろ姿でわかる。うん？

彼は会計をすませると何やら例の女性店員さんと楽しげに話している。

「おい」

前田は僕の方に振り返ると言った。前を隠せよ、それに前髪！

「なんだよ」

僕

「俺たち結婚するわ」

「へ？なに？」

「式は身内だけであげるからさ
そうだよ〜」

前田は彼女と目配せをした。彼女はうれしそうだ。ニヤニヤしやが
って…

「じゃあ俺たちはこれで」

そう言うと、前田は彼女をどこかの一国の姫のように持ち上げると、
店の扉に手をのばした。

なぜか僕にはその扉の向こうがベッ
トルームであることが分かつ
ている。

2人は扉の向こうへ言ってしまった。僕は喫茶店に取り残された。
意識が朦朧としてきた。

少し揺れてる扉からベルが鳴った…

ガランガランガラン

ガランガランガラン

ガランガランガラン

ガコンガコンガコン

バコンバコンバコン

コンコンカランコロンカラ……

……

……

目覚め（前書き）

男

「高橋先輩のカノジョ、絶対可愛いよ」

女

「たしかに綺麗かもアタシは？」

男

「キミの負けだよ」

女

「最低」

自分のカノジョが一番でしょ？」

バコッ

男

「暴力反対（痛）」

目覚め

.....!!!!!!

僕はハツとして顔を上げた。夢か？前田が裸？あり得ない夢だった。というかお姫様抱っこされていた彼女の顔が思い出せない。急いで涎を拭う。黒板に板書する教授の手が一瞬だけ止まった。カツラだと噂のその頭は異様にくろびかっていた。再び彼は板書を始める。

僕は夢の内容が現実でないことをホツとすると、1ページ分書き写す内容が遅れていることに気がつく。どうしようかと思ったが、後でだれかに写させてもらうことにした。僕のまわりは意識を失って夢の世界を旅してる人ばかりいるようだけど、前の方の座席のヒトは現実世界でびんぴんしてるから、大丈夫だろう。前田にはその写したやつを見せればいい。前田はだいたいこの講義中は寝てるから...

そういえば前田の姿を一週間ほど見ていない。最後に会ったのはあの家でゲームをした時以来だ。なにかあったのだろうか？...心配だが、まあだれか女の子の家に居座っているのだろう。前にもそんなことがあったから...

そんな事を考えていると講義が終わった。出欠カードを回収すると、教授は去って言った。それにあわせゾロゾロと皆、講堂から出

ていく。前田は欠席になるのか。まあアイツのことだ。頭の中は女のひとのことばかりだからなあ

あつ！そうだ

僕は頭の中に閃きを覚えた。

「よう！元気？」

元気な声にその閃きは打ち消された。

「ノツチどした？」

僕は反射的に反応する。ノツチこと本名は井上^{いのうえ}は、大学に入学当初から僕や前田と共によく行動を共にした友人だ。サークルが僕と前田とは違うので、会うことは前田よりも少ない。まあだいたい毎日、顔は会わせてるけど。とにかく明るくて話しやすい奴だ。

「久しぶりに飯食いにいかないかい？」

軽い感じでノツチは話す。だから取っ付きやすいのだ。

「ああいいよ」

僕は即答した。

「でもノツチからは珍しいな、彼女さんは？」

僕は訪ねた。

「まあちよつと彼女実家に帰っててさ」

「そうか、うまく行ってるの？」

「うん、順調かな。なんというかやつと関係が安定してきていい感じだよ」

ノッチはうれしそうだ。羨ましい。

「そうか。よかった。あとでのろけ話聞かせてよ」

「ふふ、いいよ」

ノッチは笑顔だ。僕はまだその入り口にも立てていないのに。2人の信頼は厚いんだろうなと思った。彼氏彼女がいる人と、いない人では大人っぽさが違うと僕は思う。安定感というか、心に余裕がある。軽々しくもないし、重すぎでもない。肉体関係もそうなんじゃないだろうか？順序やタイミングは多分、人それぞれだ。恋の始まりはほんの少しだけ踏み出すこと…

でももし、一時の感情などに流され間違えばそれは只の遊戯になってしまう、そんなの虚しいだけなのだ…そんな気がした。

前田の顔が浮かんだ。

まあとりあえず、僕はまだまだ未熟者なのだ。そう思うと気が楽になった。

「それじゃあ行こうか？」

ノッチが促す。

「ああそうだね。どこ行こうか？」

僕はメッセンジャーバックを背負った。

「あつ！」

不意に僕は先ほどの閃きが戻って来たことに気がつく。

「どうした？」

ノッチは心配そうに僕をみる。

「いや…なんでもない」

そうそう、さっき閃いたのは…

「よう！」

高橋先輩が教壇から僕を呼んだ。閃いたことがまたどこかに飛んでいく。

「先輩！この前はどうか？どうしたんですか？」

僕は訪ねた。先輩の隣には…ああ、先輩のカノジョのユウコ先輩だ。ポニーテールは相変わらず。

「ちょっと伊達^{ダテ}さんのとことかに、ようがあつてな」
堂々としてる。

「そうですか。伊達先生なら教授室ですよ。今は助教授ですけどね」
僕は答えた。

「伊達先生も偉くなったのね〜フフ」
高橋先輩の隣のユウコ先輩が言った。笑うと八重歯が見えるのは昔

と変わってない。昔はキュートが当てはまったが、今は綺麗が当てはまると僕は思う。

「みたいですね」

僕

「伊達さんに相談したいことがあったんだよね」
高橋先輩が言った。

「そうですか」

「あれ？そちらは？」

ユウコ先輩がノツチの方をみた。

「友達の井上です。お話はいつから少々。おいっ？さき行ってるから後で連絡くれよ」

「わかったよ、ノツチ」

そう応答すると彼は講堂を小走りで去っていった。

「ごめんね、なんか呼び止めちゃって」

ユウコ先輩は言った。

「いやいや。大学生は暇人なので」

僕

「そつだなあ」

……

「そうだ！ついでだ。ちょっとだけ話さないか？」

そっとうと高橋先輩は教壇のテーブルに腰掛けた。ユウコ先輩は適当な席に座る。

「はあ、いいですよ」

僕も適当な席に着いた。

「講義してよ」ジローくん「ユウコ先輩が高橋先輩を下の名前で呼んだ。彼女の雰囲気がとても可愛い。少しだけユウコ先輩に見とれてしまう僕。」

やっぱり信頼できる相手がいるのは羨ましいと僕は心底その時、思った。

1年と14日後の男の閃き（前書き）

男

「時が経つのは本当に早い」

女

「そうね。あつという間に私、オバサンかしら」

男

「そうだね。キミはきつとあつという間に、くそば」

（女の拳が当たる音）

女

「そんなことないよ、ぐらい言えよ」

男

「僕は悪くない…」

僕は悪くない…（泣）」

1年と14日後の男の閃き

大学を辞めた彼女から喫茶店で衝撃の発言を受けてから一年と二週間後、僕は同じ喫茶店で、同じ席に、ノッチと座っている。ノッチにここでランチしようと強引につれてこられた。なんでもクーポンがあるらしい。

チクチクとするあの感覚はもうなくなった。只、僕はデジャブってやつを信じたくなった。

店に入る時、例の店員さんが今日はいた。彼女の顔が少しひきつっている気がした。まあ仕方ないのか…

少しぎこちない様子で店員さんは、僕たちに水を出し、注文を受け、頼んだAランチを二つ運んできてくれた。心なしか僕の様子をうかがいながら…嫌がられている…そんなところか、女のひとに嫌がられると言つのは、嫌われるより辛いのもしれない。まあ僕は終始、ノッチと話していたから、気にはなっただけどシヨックを受けるほどのことじゃない。

「まさか前田くんが大学やめるなんてね」
ノッチが口調を強め言った。

「そうだね」まさか女好きってしてたけどね」
僕は笑いながら言った。

僕はつい先ほどの大学での高橋先輩とユウコ先輩とのやりとりを

思い出す。

「話ってなんですか？」

僕

「まあな、実はさ…」

高橋先輩は教壇に手をつきながら言った。

「先生！それは重要なことですか？」

ユウコ先輩が遠く離れた席から言った。講義はまだ続いているらしい。僕はなんだかおかしかった。

「そうだ。赤線ひいとけよ」

高橋先輩が言った。なんかいい雰囲気だ。

「あのそれで…？」

「ああ、ごめんな…」

高橋先輩がタメを作った。

「実は……」

ユウコさんと僕は結婚することになりました！」

少しホッペを赤らめながら、高橋先輩は言った。ユウコ先輩もホッペタが赤い。

パチパチパチ…

ユウコ先輩は手をたたく。

「お、おめでとうございます」

僕はいきなりの発表に戸惑った。

「そうだったんですか…」

「そうなんですよ」

ユウコ先輩

「式は？」

「これから決めるところだよ。今日は伊達さんにそのことで話だったんだ」

「そうですね、よかったです」
僕は言った。

「ふふありがとうなあとさ、それからもう一つ！」
高橋先輩は指を立てた。

「なんですか？まさか子供？」
僕は少しニヤニヤしたと思う。

「はは、違うよ、それは考えてるけど」
高橋先輩。

「なにいつてるのよ」
ユウコ先輩。

「前田のことだ」
高橋先輩は言った。

「前田ですか？あいつは今休みです」

「いやアイツは大学をやめた」

「え？」

僕は耳を疑った。

「驚くのも無理ない。なんせ急だった」

「でもなんで？」

「彼女との間に子供ができたらしい。」

「はい？え？喫茶店の？え？え？」
僕は混乱した。

「いやいや何をいつてんだ？違う。とりあえずそれはない」
高橋先輩は僕を面白そうに見ていた。

「昔の彼女とだ！」

「昔の？」

僕

「そう！ずっと前田のその彼女は前田にそのことを隠していた。そして前田は最近それを知った」

「はあ」

話が見えない。

「そして生まれたばかりの子供のため、彼女のために大学をやめた」

「え？」

話が見えないところで進んでいた。

「結婚するとか先走ったこと言ってたけど、まあそれは2人が安定してからだそうだ」

「そうなんですか、寂しくなりますね」
「本心だ。」

「それからこれは言っているのか分からないが、アイツから伝えるように頼まれた。子供のことも相談に乗ってたしな」
高橋先輩はジッとこちらを見た。

「なんですか？」
僕はそれを受け止める。

「そのなんだ…前田の相手は、ちょうど一年前の彼女だ」

「……え？」

僕は言葉を失った。チクチクが蘇る。

『私、妊娠したの？』

そっか、アイツの子供…完敗だな……
まあ終わったことだ。

「そんな寂しい顔するな。そのうちまた新しい出会いなんていくらでも転がってるさ」

言葉を失っている僕を見て、高橋先輩が言った。

「いや僕の負けです。男なんてそんなもんです」
なんだか少しだけ涙が出そうだ。

「そんな顔するなよ」勝つとか負けるじゃないだろう」世の中、白と黒じゃないぞ。灰色だってある」

「……」

「でも前田は負けたって言ってたぞ」白と黒じゃないのになあ」
高橋先輩はニヤツいていった。

「はあ？」
意味が分からなかった。

「とりあえずお前さんの勝ちだよ」
高橋先輩が言つと心強いのは確かだ。
でも今回は理解不能だった。

「まあとりあえず式には来てくれよな」
高橋先輩は言った。

「ナイスファイト」
ユウコ先輩。

そういうと2人は去っていった。
ああそういえば、この時、僕は講堂での閃きを思い出した。

今度は半角で打ち込んでみたらどうだろう？

脳内メーカーにと。

…どうなんだろう？

I・m In Love? (前書き)

男

「ノツチカツコいい」

女

「そう? 高橋先輩と同じよ」といつかこの話、終始、都合のいい男の妄想よ」

男

「そうかなあ」

女

「女はムードに弱いけど、現実的なのよ」

男

「始めて聞いた(笑)」

女

「テストに出るから」

I・m In Love?

「ハハハハハハハ」

ノツチは陽気に笑った。僕もそれにつられて笑った。お互いなんの話かは忘れている。この喫茶店での料理を食べ終えフリートークだ。1時間ぐらいたっただろうか？例の女店員さんは料理を下げてくれたり、お代わりの水を持ってきてくれたりしている。なんとなくだが、意識してしまい会話がその前後、ギコチナくなる気がして僕はならない。

「そんでさ、俺のカノジョ、ソースと醤油間違えてさ…」

ノツチは自分のカノジョとのノロケ話を始めた。ノツチはにこにこしていた。聞いていてなぜだろう？気持ちがいい。

「はははゝそうなんだあゝでもノツチ本当にカノジョ一筋なんだなあゝ」

僕

「そんなことないよあゝ」

「羨ましいし、なんかそういうヒトってほかのヒトにもモテそうだし羨ましい。」

「そうかなあ〜？」

「前田やノッチみたいに女の子にモテたいや〜」
「なんとなくだけど口にでた。」

「モテるよ」

断定気味に言ってしまう。

「ははは〜まあでも、いろんなヒトに言われても唯一、1人にモテれば俺は満足だよ。ほかはどうでもいい」
「少しマジメな顔で答えるノッチが羨ましくてしょうがない。」

「本当かよ？」

「それでも、町中でいろんな女のヒトに目言っちゃうけどね〜はははは」

陽気にカラカラと彼は笑った。

「男の性だよそれ〜」

僕も笑った。

「ほらああの店員さん、綺麗だよ〜うん」
「ノッチは少し控えめな大きささ声で言った。」

「…そうだよ〜」

僕も軽く相づちを打った。ちらりと僕は彼女の方を見てしまう。軽い罪悪感に囚われながら…

「自分でモテないと思うなら話しかけてみたら？」

僕はギクリとした。ノッチは何も知らない。

「い？な、なにいつてんの？ノッチ！僕なんかお会計のやりとりだけで意識して、テンパるよきつと…」

「別に今すぐつき合うとかそういう話じゃないよ！なんだろうな！少し言い方が悪いけど、あなたの事、ちゃんと見てますよ！みたいにな！なにか始まるわけでもないし…」

少し一歩踏み出すだけでも随分違うと思うよ」

ノッチ！それは少し説教臭くないか？と思い、高橋先輩が浮かんでしまう。

そして内心もう一歩踏み出し過ぎてオフサイドでした、と思ってしまう。もしくはレッドカードだろうか？

泣きたくなる。

「そろそろ出ようか？」
ノッチ

「ああ！そうだね」
僕

「お金、渡しとくよ。これ伝票」
ノッチに強引に渡される。たぶんのノッチとしては何も考えておらず、会話の流れからだろう。

「表で待ってる」

ノッチは店から出ていった。

カランカラン…

扉のベルが鳴った。

僕は財布の中身を確認するとレジに向かった。別に気にすることではない。ただ、お金を払ってそれで終わりだ。今までのバカなこととは、全部水に流れた。問題ない。

幸い彼女は他の席に料理を運んでいる。レジには誰もいない。奥から料理を作るシェフのような男のヒトが顔を出した。人手が足りないから店長直々にでてきたようだった。肩の力が抜けた。

「ありがとうございます〜あ？私がやりますから」

突然、例の女性店員さんの声がした。タイミングが悪い。

「そう？」

というシェフのような服装の人は奥に引っ込んでいった。しかたなく僕は固い動きで伝票を彼女に渡す。

「2人で1500エンになりますね」

彼女は言った。目があった。やはり綺麗だ…

僕と目が合うと彼女は顔がひきつる、ような気がした。気がしてならない。早くこの場から立ち去りたくてしょうがない。

僕はピッタリ1500円を差し出す。

「し、失礼します」

彼女はそれを受け取った。彼女は僕の顔をみている。僕はさっさと済ませて店の表のノッチと合流したい。

「レ、レシートいりませんから」

僕は扉に手をかけた。

「あ！待って！」

彼女が言った。ドキリとする。吐きそうだ。

「はい？」

素っ頓狂な声の僕

僕は彼女の口の当たりを見据えた。彼女の口がまるでスロー再生のように動いた。

あ・の・

…あ？

「…あの〜この前貰ったアドレス間違っていましたよ」

「はい？」

僕

「送ったら間違ってるみたいでメール、帰って来ちゃいました。」

「はい」

よくわからない

「え〜と前田さんでしたっけ？彼に聞いても知らないって…教えてくれませんでした」

彼女はしっかり僕を見据えていた。

「はあ」

「あの〜私が正しい自分のアドレス渡しますね。はいコレ」

僕は、硬くなった筋肉を懸命に動かし、彼女の名前とアドレスの書かれた紙を受け取った。

「あ、ど、どうも」

……

「なんでそんなに硬いんですか？変なの〜フフ」
彼女は僕の顔を覗きこんだ。その顔は少し微笑えんでいた。

「あ、ど、どうも」

……

不思議そうな顔で僕をみる彼女を余所に僕は扉から外に出た。

カランカランカラン

……

ノッチが表で待っていた。

「このあとどうしようか？」
ノッチが言った。

僕はそれに答えず質問に質問を重ねた。

「オ、オフサイドじゃなかったのか？」

ノッチは口に出た僕の心の叫びに驚いたようだ。

「……なんのことかわからないけど……とりあえずオフサイドじゃないんじゃないの……」

「はいっ？」

僕は間の抜けた返事をした。

「何かはわからないけど、オフサイドじゃないと……自分で思えばいいさ」

ノッチはゆっくりと言った。

「…うん」

「ただし心の中にしまっておいた方がみのためだけだね……」

ノッチはカラカラと笑いながら歩き出した。

僕はその背中を追いかけながら、空を見上げてみた。

「青い……」

僕は眩きノッチの背中に追いついた。

「春」が近づいた気がした。

そして、最後に…（前書き）

女

「絶対男の妄想！」

男

「ああそう」

女

「そうよ」

男

「今の君と僕は？」

女

「……（笑）」

そして、最後に…

僕がその後、アドレスを打ち間違えてメール送信に失敗しそれに気づかなかったとか、そのあとよく見たら間違いに気づいてもう一度送信したら彼女にメールが届いたとか、好きか嫌いかわれられたら好きみたいな女心に振り回されたとか、女心はわからないと叫びたくなったとか…

云々あったけど、細かいことはいいだろう。

その後、僕たち2人がどうなったのか？

ご想像にお任せしたい。

とりあえず今言いたいのは、初めてというのは少なからず痛みや苦しみを伴うわけで…

アーダコーダ言ってるその時間が大切で…

恋愛で言えば、そのはじめの一步を越えた前と後では見える景色が違う。押し方と引き方がわからなくて四苦八苦した苦い経験とか…

好きからくる感情のやり場に困ってしまったり…

でもどうしても人間って者は過ぎた景色忘れてしまうもので…

どんな始まりや終わりであれ…一番根っこの部分は忘れてしまいがちなんじゃないだろうか？童心を忘れてしまふのは哀しい気もするし…

勇敢に一歩踏みだし

『初心忘れるなんちゃらだ』

なんて高橋先輩みたいに説教じみたことを思ってしまう今の僕だったりする。

女

「ね〜早く行こうよ」

カノジョが呼んでる。

ああ、僕のカノジョを紹介しよう？えっ？ノロケ話は聞きたくない。

そうですね。

女

「はやくしてよ」

男

「はいはいわかったよ…うるさい人ですよ全く」

まあとりあえずこれからの人も、進行形の人も、悩みもがいている人も、どうか忘れないで思い出してみてください。心にしまっているあなたの大切なブ…」

女

「結局さあ〜それが言いたかったんでしょ？」

男

「はははっまあそうですね（笑）」

『BRAVE SOMEDAY』を！

女

「今日は天気が良くてデート日よりよね」

男

「そうだね（喜笑）」

青い春を忘れずに…

今よりもっと幸せになれますように...

僕は願いたい

おしまい

そして、最後に…（後書き）

物語はこれで終わりです。あくまで「僕」の視点で読んで貰いたかったので主人公に名前はありません。

書いてみて最終的に読み手を置いてしまった独りよがりの恋愛論みたいになってしまいました（笑）最悪ですね…反省してます。でも少しだけでも最悪な部分が自分に残っている時がある、そんな感じが伝わったと思います。

頭の中でこんな理想の結末もあって良い気がしたんだとおもいます。読者の方のご想像にお任せします。

最後まで読んでくれた方ありがとうございました。

よろしければ他の作品もろとも、これからもよろしくお願い致します。

ありがとうございましたm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7786q/>

BRAVE SOMEDAY

2011年11月13日12時08分発行